

1950～1960年代の高知県における市町村民運動会

清原 泰治

(2011年10月3日受付, 2011年12月19日受理)

Athletic Meetings in Local Communities in Kochi during the Period of the 1950s through the 1960s

Yasuharu Kiyohara

(Received: October 3, 2011, Accepted: December 19, 2011)

要 旨

本研究は、1950～1960年代の高知県内の市町村民運動会について明らかにすることを目的とする。

1950年代、「昭和の大合併」後、地域住民の融和を図ることを目的に、市町村民運動会が開始された。県行政は、運動会で実施する種目を提案したり、自治体に配置した体育指導委員に運営を担わせるなど、市町村民運動会の開催を推進した。

初期の段階では、地区対抗方式による運営方法のために、住民間の対抗意識が助長され、トラブルが問題となる。地区内のローカリズムを強化するという、政策的意図とは逆の結果になっていた。主催者は、トラブルを防ぐために、娯楽性の強い種目を取り入れたり、採点方法を工夫するなどして、円滑な実施を図った。

このような運営上の工夫もあって、この時期に市町村民運動会は地域に定着するが、過疎化の進行や地域住民の関心が多様化していく中で、1970年代から徐々に衰退していった。

キーワード：スポーツ史、地域スポーツ・イベント、市町村民運動会

Abstract

The present study focuses on athletic meetings held in local communities across the area of Kochi Prefecture during the period of the 1950s through the 1960s. It was in the 1950s that communal athletic meetings were initiated after the Great Mergers of the Showa Era, which represent large-scale mergers of local communities across Japan during that period, in order to promote harmony among people of the newly established community. The prefectural government of Kochi made attempts to help cities, towns and villages hold their own athletic meetings by proposing new events for meetings and having sports instructors placed in such communities take on administrative work. In the beginning, there occurred problems due to administration based on inter-community competition, which caused excessive rivalry among the communities. This was opposite to what had been originally intended in that the method resulted in strengthening the localism of communities. This led to the sponsors' efforts toward organizing events in smoother ways by adopting more fun-oriented events and devising better methods of scoring. All of these efforts helped communal athletic meetings take full root during this period. Nonetheless, such activities gradually declined in the 1970s and afterward when depopulation became more widely apparent and people's interests more diversified.

Key words: sport history, communal sports meetings, athletic meeting

1. はじめに

『高知県スポーツの歩み』には、「平成の大合併」以前の高知県の旧53市町村のスポーツ史が所収されており、1950年代から60年代にかけて、市町村民運動会を始めた自治体が多いことがわかる¹⁾。

裏付けとなる資料がないために開始年が特定できないものの、上記の表にあげた自治体の他にも、かなり古くから市町村民運動会を開催していた市町村が少なからずあった。おそらくは、表にあげた市町村と同じ頃に始まったと思われる。

各市町村には、それぞれの歴史があり、スポーツの歩みについてもそれは同様である。それにもかかわらず、市町村民運動会の開始時期が集中しているのには、何らかの理由があると考えられる。

これまでのスポーツ史においては、市町村民運動会について歴史的に分析した研究成果は見られない。

本研究は、1950年代から1960年代に始まった高知県内の市町村民運動会について明らかにすることを目的とする。

本研究における第一の課題は、この時期の「高知新聞」に掲載されている運動会の記事を手がかりに、当時県内で開催されていた運動会の状況や、県・市町村がそれらの運動会にどのように関わっていたのかを明らかにすることである。

次に、旧池川町(現仁淀川町池川地区。以下、池川町とする)の「町民運動会」と、旧西土佐村(現四万十市西土佐地区。以下、西土佐村とする)の「村民運動会」を対象に、市町村民運動会が何を意図して開催されていたか、どのような種目がどのように実施されていたかを明らかにし、運動会が果たしていた社会的機能を考察することを第二の課題とする。

さらに、1950年代から1960年代に、市町村民運動会を実施する市町村が増加した理由について明らかにすることを第三の課題とする。

	旧市町村名	運動会の名称	開始年
1	池川町	町民運動会	1955年
2	十和村	村民運動会	1958年
3	大野見村	村民運動会	1950年代
4	本山町	町民運動会	1961年
5	本川村	村民運動会	1963年
6	北川村	村民運動会	1967年
7	吾川村	村民運動会	1960年代
8	日高村	村民運動会	1960年代
9	中土佐町	町民運動会	1960年代

(『高知県スポーツの歩み』から筆者が作成)

2. 1950～60年代の高知県における市町村民運動会の実施状況

運動会が全国各地で開かれるようになるのは、1887(明治20)年前後からであると言われている。高知県の状況を見ると、一つに地域住民の親睦、娯楽のための運動会があり、明治10年代ごろから各地で開催されていたようである。一方、学校においては、明治10年代から20年代にかけて、船遊びや遠足を基盤に始まっている。隊列を組んで校外に出て運動する。これが学校における運動会の初期の形態である。

以後、学校を中心に、学校行事としての運動会と、地域住民による運動会が盛んに開催されるようになる。

1901(明治34)年5月31日付の土陽新聞に、29日に土佐郡鏡村(現高知市鏡地区)で村内連合運動会が開催され、旗取り競走、提灯競走、二人三脚、仮面探り、帽子とり、土器割りなどを行い、非常に盛会であったという記事がある。県内の各地でこのような運動会が開催されており、運動能力を競う「競走」や「競争」とともに、娯楽的な遊戯種目も実施されていた。

1908(明治41)年8月4日付土陽新聞は、佐川同志会の運動会に関する予告記事を掲載している。記事を

要約すると以下ようになる。

昼間は斬新な運動競技数十種と、近町村各学校選手の責任競走がある。余興として、書画、絵はがきの展覧、盆栽の陳列がある。夜間は、提灯行列、花火がある。場内売店では福引きを行い振時計、反物その他数千点の景品をそろえるということである。

地域の運動会は身体活動の場であるとともに、趣味の発表の場となり、地域住民の親睦を深めるという役割も果たしていた。運動会は地域のハレの日の行事であり、祭礼的な機能を有する行事であった。

このような地域の運動会は、第二次世界大戦中の中断をはさんで、戦後も社会情勢が安定するにつれて復活していた。会場としては地域の学校の運動場であったり、共有地であったりした。河原で実施していたという地域もある。運動会は、なくてはならない地域の行事として根付いていた。

このような運動会は、主には校区単位や集落単位で実施されていた。1960(昭和35)年11月11日付高知新聞によれば、本山町大石地区では、11月13日の集落の祭礼にあわせて、「全部落民参加の農民運動会」が開催されることになっており、「ナワない、稲かけ競争など農民にふさわしいものばかりで、おとなも子どもも大喜び」の運動会になりそうだと報じられている。

翌年12月11日付の高知新聞には、「たんぼで運動会 農休日に須崎市土崎部落」という記事も見られる。「十日の農休日に部落全員が出て同部落のたんぼで楽しい運動会を開いた。豚追い競走、縄ない競争、モチ食い競争など数々の珍種目におとなも子供も日ごろの仕事の疲れを忘れて一日を過ごした」という²⁾。

1962(昭和37)年11月4日には、「奇芸、珍プレーの続出 秋の休日楽しむ 中村市婦人会運動会」が「三千人近い見物人」を集めて開催されている。

かむった白い面に美人の顔を自作自演する『私はミス中村よ』を皮切りに、風船を腰で割る『食欲の秋』など次々にくりひろげる競技は珍プレーの続出。応援団もおとめのころに返ってセーラー服に身を固めた高校生？フラダンサー顔まけの腰ふりで調子をとるレディなど。そのたびに校庭は爆笑のウズ。

県下でも珍しい女ばかりの運動会は民謡、仮装行列など多くの種目でにぎわい、出場者、見物人もいっしょになって、楽しい秋の休日を送った³⁾。

県内各所で、地域の独自色にあふれた運動会が誕生し、あるいは受け継がれて、地域文化として位置付いていた。

その一方で、1950年代後半から、行政主導の市町村民運動会が開催されるようになる。

「“応援コンクールも” 市町村民運動会の種目 県教委で作成」という1957(昭和32)年9月17日付の高知新聞の記事に着目したい。

高知県では、この年7月に各市町村に社会体育指導委員を配置している。「社会体育」の推進体制の整備が始まったのである。

この体制下では、市町村民運動会は、社会体育指導委員が中心となって実施されることになっていた。そこで、高知県教育委員会健康教育課は、参考資料として「市町村民運動会案」を作成したのである。

競技種目次の通りで、従来各地区バラバラに行われてきた運動会が、今年からは社会体育的な意味をもち、住民のみんなが参加してたのしく、しかも体育的な内容に満ち、さらに各地域の特殊性を織り込んだ運動会となることが期待されている。

百疋▽おしどり二人三脚▽リレー▽マスト登り▽ロマンス競走(男女が縁結びの札を拾ってコンビをつくるもの)▽借物競走▽樽ころがし▽学童リレー予選▽民謡踊り▽職域別、年齢別各リレー予選▽仮装行列▽三代競走(孫、子、親の順)▽応援団コンクール▽紅白玉入れ▽学童リレー▽タイつり▽職域

リレー決勝▽年齢別リレー決勝⁴⁾

この案を作成した意図や、上記の種目が選定されている理由は明らかにできない。

おそらく、任命されたばかりの体育指導委員たちは、これらの種目を見せられ、意気に感じたことであろう。すでに市町村民運動会を実施していた場合は、これらの種目をできるだけ導入しようとしたはずだし、まだ、市町村民運動会を実施していなかった場合は、その実現に力を注ぐことになったであろう。現段階では実証はできないが、これを契機に、市町村民運動会の開催が各市町村に広まるとともに、プログラムの内容に一定の影響を与えたことが予想される。

11月3日、安芸郡室戸町（現室戸市）での町民運動会で、事故が発生した。18歳の少年が部落対抗競技のマスト登りで、マストの上約6メートルから転落し、右手首2カ所を骨折した。

この事故について、町総務課長が「こんな重傷者が出たことはじめてで、何とも申し訳ないと思っている。町長とも話合っ^て見舞金を出すようにしたい」⁵⁾とコメントしたことが記事に見られる。このことから、行政の手によって運動会が開催されていることがわかる。

1957年11月の高知新聞には、運動会の記事が例年になく多く取り上げられている。

11月5日付の高知新聞には、10日に後免町（現南国市）の久礼田小中学校グラウンドで、「町村合併一周年記念」の町民運動会が開かれることが告知されている。

11月6日付の同紙には、3市町村が主催する市町民運動会の記事がある。11月3日に安芸市民運動会が11地区のチームが参加して安芸中学校校庭で開催された。同日高岡郡佐川町の佐川地区民町民運動会が開かれた佐川小学校には7000人が集まった。甲浦町（現東洋町）でも3日に中学校のグラウンドで町民運動会が開かれている。

11月10日には赤岡町（現香南市）の赤岡小学校で、町内10地区対抗で町民運動会が開かれたことが、12日付の同紙に書かれている。

さらに、11月23日には、高知市民運動会があった⁶⁾。会場は高知市補助グラウンドで、15校区から1500名が参加。リレー、玉ころばし、マスト登りなどの競技が行われ、16時からの仮装行列では、初月校区の「どん底」、潮江校区の「火消し」、江の口校区の「ネール首相と象のインディラ嬢」、江陽校区の「桃太郎」が人気を集めた。「参観の氏原市長らとともに楽しい一日を過ごした」という。

このように、県内では市町村や校区、地区ごとに、さまざまな形態の運動会が展開されていた。学校行事としての運動会はもとより、市町村民運動会や地区運動会、職域における運動会や農民運動会など、行政や民間が運営する運動会を多くの人々が楽しんでいた。

ところが、1969（昭和44）年10月9日付の高知新聞に、「運動会は減る傾向 県下『体育の日』の行事」という見出しで、次のような記事が掲載されている。

十日は『体育の日』—（中略：筆者）県下各市町村はさまざまな行事を計画、お天気の方も『気持ちよい秋晴れ』と予報されていて、県民がスポーツを楽しむ一日となりそうだ。

八日までに県教委へはいった報告を見ると、ことしは運動会が減った半面、バレー、ソフト、卓球などバラエティーに富んだ競技大会で住民の親睦を深めようとする催しがふえた。

中土佐町では約2000人の町民が参加する体育祭が計画されており、伊野町（現いの町）では町内子供相撲大会、室戸市では柔道大会、高知市ではスポーツテストが予定され、ピクニックを企画している村もあった。

運動会からさまざまなスポーツ行事に変質していった理由については明らかにできないが、一つには、人々の関心が多様化し、運動会というスポーツ・イベントでは満足しなくなったこと、また、過疎化の進

行で参加者が減少して行っていたことなどが考えられる。

現在の高知県では、かなりの市町村民運動会が姿を消し、継続している運動会も参加者集めに苦勞する状況になっている。

3. 池川町における町民運動会

旧池川町（現仁淀川町池川地区。以下、池川町とする）の「町民運動会」は、1955（昭和30）年に始まっている。もちろんそれ以前にも町内各地で運動会が行われていたのだが、この年から全町民あげての運動会が開催された。町民運動会が始まった目的や、この時期に実施されていた種目については資料がなく、初期の運動会の実態については明らかにできない。

池川町は、1948（昭和28）年の町村合併促進法を契機とする「昭和の大合併」において、合併相手が見つからず、高知県内で唯一、合併しなかった。梅木直久町長は、池川町の置かれている立場について、1957（昭和32）年2月発行の広報で、「県下幾十の大町村に互^互して独立独歩自力本願によって勇往邁進すべき立場と成った⁷⁾」という認識を示している。合併によって規模が拡大した他の町村に劣らずに、現状維持の町勢で発展を遂げるためには、町民間の融和が必要であった。

1957（昭和32）年12月1日付の「広報いけがわ」に、梅木町長は、「町民運動会を終わりにて」というテーマで、次のような感想を載せている。

今でも静かに目をとざると、あの十重二十重に輪を^互絵いて町内一つに或は各校下毎に踊った様々の踊が目先の先にくっきり浮び出る。放送係は「これこそ美の祭典だ、何と云う美しい光景だろう」と極言されていた。本当にうるはしい限りであり、和の象徴であり、美の極致である。（中略：著者）恐らく池川には現在あれだけの観衆を集める行事は他にはないと思う。四千から五千に垂とする観衆は、開始時刻の九時より、万才三唱の四時半迄、身動きもしない。（中略：著者）

運動会も年一年と熱もかかり気合も乗ってくるので益々慎重を要すると思うが毎度私の申すように和合であり、親睦であり、慰安であって是非其の場限りであって貰い度い、という運動会のすんだ後迄色々考えて居る方など一人もあろう筈はないが、其の場でも出来る事なら文句なく談笑の裡にやりたいものである。

兎に角多少の問題はあるにしても町民運動会は誠に面白い良い事だと思う。（中略：筆者）現在の様に採点も加味しつつ面白くおかしく和気藹々裡に終始する様⁸⁾願してやまない。

この手記では、第3回町民運動会の様子が記されていると思われる。観客数は実数とは思えないが、多くの町民が集まり、たいへんな盛り上がり方であったことが推察される。町長が認識している運動会の目的は、「和合」「親睦」「慰安」であり、町民が会場に集まり、親睦の輪を広げていくことを強く期待している。

この記事では、若干ではあるが競技種目についても触れられている。小学生から50歳代まででチームを組む「親子三代リレー」といった競技や、福引き、縄ない、踊りといった娯楽性の強いプログラムも用意されていたようである。

注目したいのは、この記事に町長が書いている「出来る事なら文句なく談笑の裡にやりたいものである」「多少の問題はあるにしても」ということである。町民運動会では、看過できない町民間のトラブルが発生したことが読み取れる。

県内で唯一合併できなかったために、梅木町長は町民が心を通わせ、力を合わせることによる町の発展を期待していた。運動会を「融和」のシンボルとしたかったのである。しかし、おそらくは得点競技をめ

ぐるいざこざが発生し、そのトラブルはその場限りでは終わらなかったのだろう。

しかし、梅木町長の運動会への思い入れは強く、1965(昭和40)年の第10回運動会で、個人として優勝旗を寄贈している⁹⁾。

1959(昭和34)年12月1日付の広報によれば、11月3日には大雨の中で町民運動会を実施している。当初16種目を実施する予定であったが、雨のため12種目に縮小して実施した¹⁰⁾。それほどに、町民たちや行政の町民運動会に対する思いは強かった。

第10回町民運動会では、高知工業高校のブラスバンド部が町内をパレードするというアトラクションも登場した¹¹⁾。広報に当日の採点集計表の写真が掲載されている。「タイリツリレー」「バウンドボール」「マスト登り」「ジャンケン」「あやおり」「一輪車競争」「ボーリング」で競い合った。千人近い町民が集まり「場内立錐の余地もない程の盛会」であったという。

1968(昭和43)年の第13回町民運動会では、「玉入れリレー」「バウンドボール」「しゃげき」「障害物リレー」「ジャンケン」「あやおり」「五輪競技」「マストのぼり」の8種目で、町内の8地区(池上、池下、坂本、大西、大野・椿山、用居・瓜生野、狩山、安居地区)が勝敗を競った。この年も、千人近い町民が集まって盛況であったが、「若い人々の町外進出で選手に困るとい町民運動会ではあるが¹²⁾」という記述も見られ、過疎化の進行が運動会に影を落とし始めていた。

また、この記事の中では「町民総和合」「町民体力づくり」という目的も見られ、「体力づくり」が加わっている。1964(昭和39)年のオリンピック東京大会以降、日本人の体力向上が叫ばれ始めたが、池川町でもその影響が見られる。

1972(昭和47)年11月20日付の広報には、第17回町民運動会で実施された全競技種目が掲載されている。

百米競走	一般
○亭主操縦法	一般
年齢別リレー	一般
○バウンドボール	一般
青年団競技	青年団
ボール相撲	一般
婦人会競技	婦人会
○あやおり	一般
ありがとうの歌(踊)	一般
綱引き	一般
○玉入れ	一般
○ジャンケン	一般
老人競技	老人
○ボーリング	一般
○平均	一般
○二百オリレー	一般
各種団体リレー	各種団体
○マスト登り	一般
豊年おどり	一般 ¹³⁾

○の付いた種目が採点の対象となる種目である。翌月発行の広報に、いくつかの種目についての実施の

様子が記載されている。

○亭主操縦法

ヒョットコ面に目かくしされた亭主と、両手を綱で連絡しての奥さま、口も使えず「あなた」とどなれも出来ず、思いにまかせぬハンドルならぬ綱さばき、とつとへちへ向けていく旦那さまを、引きもどし引きもどしての誘導ぶり。

奥さまも汗だく汗だく。

(中略：筆者)

○ボウリング

本物のピンを前にして、フォームよろしく気どっては見たものの、ボールが思うようにころがってくれず、さすがのボーラー達も日ごろの腕前が発揮できずくやしそう¹⁴⁾。

これらの競技は、観衆の笑いの中で競い合いが展開されたことだろう。参加している地区ごとの「競争」にはなっているが、見物する側から見れば競技者のパフォーマンスはユーモラスであり、競い合いではあっても、競技者同士の感情的な対立につながる可能性の低い種目が並んでいる。「笑い」が勝敗へのこだわりを和らげ、運動会の娯楽的な性格を強化し、あわせて、観衆の「怒り」や「対立」の感情を緩和する作用を持っていたことは容易に想像できる。

「二百オリレー」以外のリレーが得点競技に入っていないのは、判定をめぐる地区間のトラブルを避けるためであると思われる。

また、一般の他に婦人会や青年、高齢者が出場する種目が用意されており、できるだけ多くの町民が参加できるように工夫がされている。

このように、池川町民運動会は、町内の「融和」を目的に開催され、その考え方に沿って、多くの町民の参加を促すためにも、娯楽性の強い種目が実施されていた。池川町民運動会は、町民間の、また地区住民間のつながりが強まることを意図して企画・運営されたスポーツ・イベントであった。

4. 西土佐村における村民運動会

四万十市西土佐西ヶ方地区在住の元西土佐村役場職員の井上満則氏は、旧西土佐村(現四万十市西土佐地区。以下、西土佐村とする)での村民運動会について、昭和の大合併によって新たに誕生した西土佐村の「村民融和」のために始まった可能性を指摘している¹⁵⁾。村民運動会が始まる前の西土佐村の各地区では、小学校の学校行事としての運動会とは別に、地区住民による運動会が小学校の運動場で実施されていた。そして、1958(昭和33)年4月に江川崎村と津大村が合併して西土佐村が誕生し、村民運動会が開始される。

1959(昭和34)年10月20日付の広報「にしとさ」には、「村民運動会江川崎で開催 実施計画決まる！」という見出しで、第2回村民運動会に関する記事が見られる¹⁶⁾。

本年度村民運動会は、本十四日の区長会で次の通り開くこととなりました。意義ある文化の日に、昨年同様村民こそぞって参加し、一日を楽しく過ごしましょう

昭和三十四年度村民運動会実施計画

一、目的

村民がこそぞって一場に会し、健康な体育レクリエーションを通じ、融和と親睦を深め、社会に役立つ心身の育成を図り明朗西土佐村の建設に資するをもって目的とする。

二、方針

- 1、多くの人が参加できとも楽しめる種目をえらぶ。
- 2、勝負そのものにこだわらない。
- 3、みんながなごやかで気持ちよく進んで参加する。

村民運動会の実施計画が区長会で決定されていることは興味深い。主催は西土佐村であり、役場職員が計画や準備を行っていたはずであるが、計画の最終決定者は区長会になっている。このことから、「上からの」運動会ではなく、あくまでも「村民の」運動会にこだわっていた姿勢が読み取れる。

また、「方針」に見られるように、多くの村民が参加できるような種目を選定するとともに、勝負にこだわらないことや「なごやかで気持ちよく」という表現から、村民運動会を通じて、新しくスタートした西土佐村の村民間の「融和」を図ろうとする意図で開催されていたことがわかる。

この年の村民運動会は、11月3日午前9時から15時まで、江川崎の西土佐村公設グラウンドで開催されることになっており、小学校区ごとにチームを作って参加した。1位の6点から6位の1点まで、競技ごとに得点が与えられる校区対抗方式で競技は実施され、村費から約2万円の賞品が用意されている。

残念ながら、村民運動会が始まった頃の競技種目に関する資料は見つかっていない。

西土佐村では、参加者を増やすための手だてとして、交通費を支給していた。西ヶ方地区の区長が保存している文書の中に、村長であり村民運動会会長であった三石重行から、区長に宛てた「村民運動会輸送費補助金の配分について」という表題の文書が発見されている。文書の日付は運動会後の1961（昭和36）年11月30日である。

それぞれの地区に支給された金額を見ると12地区に対して、計15,120円が支給されることになっていた。井上氏によれば、交通費の支給はこの年限りのことではなく、昭和40年代になっても継続されていたという。

このことから、一地区でも、一人でも多くの参加者を集めるために、「村民融和」の実現を目指す村が、かなりの努力を村民運動会に傾注していたことが推察される。

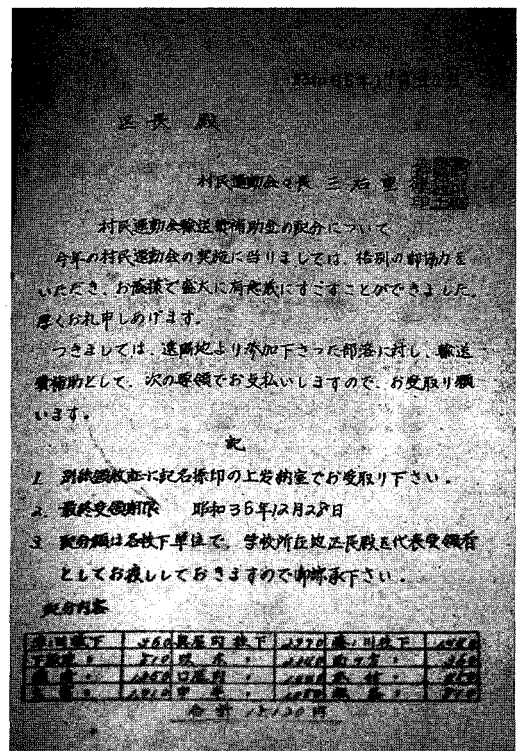
しかし実際には、校区対抗方式であったこと、その年の運動会シーズンの「最後のしめくくり」であったことから、出場する選手や応援にきた住民たちの意気込みはたいへんだったようで、頻繁にけんかが起きたという¹⁷⁾。

1967（昭和42）年1月1日付の広報には、前年の村民運動会についての以下のような報告がある。

この運動会は西土佐村発足以来第八回となるが、今まで競技をめぐってトラブルがつきもので、進行上極めて問題があったが、本年度の運動会はいよいよしたトラブルもなく、スムーズな進行のなかで、いともなごやかに「村民が一堂に集い親睦と融和を深め健全な心身をつくる」という趣旨にふさわしいものであった¹⁸⁾。

わざわざこのような報告がなされているということは、それまでの村民運動会で多くのトラブルが発生し、主催者はその防止策や対策に苦慮していたことが想像できる。

一方で、運動会後には地区の公民館などで、地区住民による宴会（「おきやく」）が催され、村民運動会の日、地区住民間の内的連帯が強化される機会となっていた。



行政側が意図した「村民融和」は一定達成されていたかもしれないが、村民運動会は地区対抗方式で開催されるため、村全体の連帯感を高めるよりもむしろ、地区内のローカリズムを高め、連帯を強化する社会的な機能がより強く発揮されたと考えられるべきであろう。

5. まとめと今後の課題

1950年代後半に市町村民運動会が開始されるようになったのは、「昭和の大合併」によって、地域住民の「融和」を図る必要に迫られた市町村が、それまで各地区で開催されていた運動会の社会的機能を市町村単位にまで拡大し、地域住民間の連帯の強化を図ろうとしたことが大きな要因であると考えられる。そのためには一人でも多くの住民を地区運動会に動員することが必須の条件であり、旧西土佐村では各地区に交通費の補助をするという施策までなされていた。

また、高知県教育委員会は、運動会で実施する種目例を提示したり、各自治体に配置した体育指導委員に運営を担わせるなど、市町村民運動会の開催を推進した。そのため、ほぼ同じ時期に、各自治体で市町村民運動会が始まったと考えられる。

したがって、この時期の市町村民運動会は行政主導の、いわゆる「上からの」開催であったとすることができる。

初期の段階では、地区対抗方式の競技形態によって地区住民間の対抗意識が助長されることになり、地区内のローカリズムを強化するという、政策的意図とは逆の結果になっていた。

主催者である市町村は、運動会におけるトラブルを防ぎ、融和の効果を高めるために、娯楽性の強い種目を取り入れた。「笑い」が勝敗へのこだわりを和らげ、運動会の娯楽的な性格を強化し、観衆の怒りや対立の感情を緩和する作用を持っていたことは容易に想像できる。また、トラブルの元となる競争的な種目を得点競技から外すという運営上の工夫によって、円滑な実施を図った。

市町村民運動会は、地域の最も重要なスポーツ・イベントとして定着するが、過疎化の進行や地域住民の関心の多様化の中で、1970年代から徐々に衰退していった。

本研究で取り上げた事例は、旧池川町と旧西土佐村に限られており、県内各市町村の事例を詳細に検討することが必要であることは十分に認識している。今後の課題としたい。

※本研究は科研費(21500602)の助成を受けた研究成果の一部である。

<引用および注>

- 1) 清原泰治「市町村行政の歩み」、高知県スポーツの歩み編集委員会編(2006)『高知県スポーツの歩み』、高知県教育委員会、pp.114-222に所収。
- 2) 高知新聞、1961年12月11日付。
- 3) 同上、1962年11月6日付。
- 4) 同上、1957年9月17日付。
- 5) 同上、1957年11月5日付。
- 6) 同上、1957年11月24日付。
- 7) 「広報いけがわ」第2号。池川町役場(1993)『広報いけがわ縮刷版(上巻)』、p.5に所収。
- 8) 同上、第9号、1957年12月1日付。同上、p.35に所収。
- 9) 同上、第105号、1965年12月10日付。同上、p.492に所収。

- 10) 同上、第33号、1959年12月10日付。同上、p.143に所収。
- 11) 同上、第105号、1965年12月10日付。同上、p.492に所収。
- 12) 同上、第140号、1968年12月20日付。同上、p.707に所収。
- 13) 同上、第185号、1972年10月20日付。同上、p.903に所収。
- 14) 同上、第186号、1972年11月20日付。同上、p.907に所収。
- 15) 平成23年9月13日、高知県四万十市西土佐西ヶ方のご自宅での証言による。
- 16) 「にしとさ」第4号、1959年10月20日付。西土佐村広報委員会(1988)『広報にしとさ縮刷版 第1巻』、高知県幡多郡西土佐村、p.7に所収。
- 17) 井上満則氏の証言による。
- 18) 「にしとさ」第33号、1967年1月1日付。前出、p.98に所収。